幼児期における手先の不器用さのアセスメントと支援の開発

企画者･司会者　尾崎 康子（相模女子大学人間社会学部）
話題提供者　尾崎 康子（　同　上　）
Toth Gabor（相模女子大学学芸学部）
勝二 博亮（茨城大学教育学部）
指定討論者　澤江 幸則（筑波大学体育系）

KEY WORDS: 発達性協調運動障害，手先の不器用さ，アセスメント

【企画趣旨】

手先の不器用さを示す子どもの中には，発達性協調運動障害（DCD）の子どもが含まれていること，そして発達障害児の多くがDCDを合併していることが報告されている。わが国では，DCDに対する社会的認識は低く，DCDの診断やアセスメントがほとんど行われていない状況である。しかし，幼児期後半から学童期において適切な支援を行うと不器用さが軽減することが知られているため，発達早期に手先の不器用さに対するアセスメントを行い，それに基づく支援をすることが求められる。本シンポジウムでは，わが国で取り組まれている幼児を対象にしたアセスメントを紹介するするとともに，支援のあり方について提案する。

【話題提供者の趣旨】

幼児期の手先の不器用さのアセスメントと支援法の開発

わが国では，幼児期にDCDと診断されることは極めてまれである。しかし，保育や療育の場において子どもの手先の不器用さをアセスメントすることができれば，診断を待たなくても早期に支援を行うことができる。そこで，筆者は，保育者が実施できる描画動作テスト（Pre-Writing Test：PWT）を開発した。PWTは，書字動作の前段階である描画動作を調べることによって，手先の不器用さをもつ子どもをスクリーニングするための検査である。PWT は，円塗り課題，点つなぎ課題，線引き課題からなっており，子どもは線からはみ出さないように描くことが求められる。各課題の描画結果から発達段階を調べ,それが早熟,標準,遅滞のいずれの発達領域に相当するかを判定することができる。最終的にはPW発達月齢を算出する。また，筆者は，PWTを支援に繋げるために,PWTの評価に基づいて実施できる描画トレーニングブックを作成した。幼児期に描画や描線の動作を沢山経験させることは，就学後に必要とされる書字動作の習得にも有効である。（尾崎康子）

ヨーロッパにおける幼児へのアセスメントや支援の状況

ヨーロッパではDCDは発達臨床場面における身体的不器用さの「clumsiness」という診断名で呼んでいた歴史がある。現在ではDCDを発達障害のひとつと捉え、特に幼児期からの適切な指導が必要とされている。一般的に幼児期後半から学童期（4歳から7歳）にかけての3年間で子どもの感覚運動能力は飛躍的な発達を遂げる。

学習に必要な様々な能力の発達遅れは，学齢児になって突然現れるのではなく，幼児期からその微候がみられる。ヨーロッパの様々な国では5歳からの1年間に全ての幼児に対して就学前の発達スクリーニング検査が行われている。ハンガリーでは全ての5歳児は就学前に義務教育として1年間幼稚園に入園する（デンマークでは国民学校の0年生の幼稚園クラスに相当)。学習困難は就学前に発達遅れあるいは偏りが先行し、主に姿勢の安定性やバランス，協調運動，粗大運動，微細運動，短期記憶の問題，聞く，話すなどといった面に困難さを有している。発達遅れが見られる「気になる」幼児に対して、その1年間に園内で個別支援が行われる。さらに，ハンガリーでは発達遅れが見られる幼児は就学前発達アセスメント後に保護者の了解の上で，もう1年間幼稚園に残ることが可能である。学習障害高リスクのある幼児に7歳までの1年間で就学前の発達支援が行われる。今回はこの発達支援のために開発された感覚運動プログラム，微細運動及び手先の訓練のための描画トレーニング（認知版）を紹介する。（Toth Gabor）

運筆過程からみた幼児期の書字指導

幼児期に積極的な書字指導を行う必要はないものの，ひらがな書字に関しては就学前にすでに書字可能な子どもが多いのが現状である。DCD 児は手先の不器用さが顕著に現れることも多く，子どもに無理に書字を求めることにより学習に対するモチベーションや自己肯定感の低下を引き起こしかねない。そこで，幼児期におけるひらがな書字に関わる認知要因を明らかにするために，視覚運動統合能力とひらがな書字獲得との関連を検討した(郡司･勝二,2015)。その結果，運筆能力，空間認知能力，図形模写能力がひらがな書字獲得に関わっていることが明らかとなった。さらに，最近では，デジタルペンを用いて運筆プロセスを数値化することが可能となってきた。尾上ら（2016）は書字入門期の子どもたちを対象として，書字指導において多用されるなぞり書きや視写時の運筆プロセスを定量的に評価した。運筆スピードに注目すると，なぞり書きについては年齢のいかんに関わらず，運筆スピードに違いがみられなかったが，視写のように手本を見ながら正確に書き写すことが難しい場合にはなぞり書きよりも運筆スピードが有意に上昇してしまうことが明らかとなった。したがって，文字を正確に書き写すようになるには運筆スピードのコントロールが必要になるものと示唆された。（勝二博亮）

【指定討論者の趣旨】

DCD 研究の視点から検討したい。すなわち DCD の支援を考える際には大きく3つの問題を解決していく必要がある。1) DCD 特性への理解とアセスメント、2) DCD の社会性や情動等の他の発達との関連、3) そしてそれを含めた複合的なアプローチ方法である。

DCD 特性を明確にするために国際的に活用されているアセスメントにM-ABCがあるが日本版は開発段階である。そのなかには手先の不器用さ領域がある。またDCDにおける運動以外の発達特性との関連性についての国内での研究は極めて少ない。そして以上の点が明確にならない限り、DCDの本質的問題理解と同時に複合的なアプローチを含めた支援の方向性は定まらないだろう。

すなわち手先の不器用さを含めたDCDの問題は、運動の単一的な問題ではなく発達的機能連関に基づいた研究と実践の積み重ねを必要とされるのである。こうした点での議論を期待したい。（澤江幸則）

(OZAKI Yasuko, TOTH Gabor, SHOJI Hiroaki, SAWAE Yukinori)